

「司馬遼太郎における文明観の変遷と沖縄——周辺文明論の視点から」

高橋 誠一郎

はじめに

2001年は国連によって「文明間の対話年」とされたが、残念なことにその年にニューヨークで旅客機を用いた同時多発テロが起きた。むろん、市民をも巻き込むテロは厳しく裁かれなければならないし、それを行った組織は徹底的に追及されなければならないことは言うまでもない。ただ、問題なのはこれを「新しい戦争」の勃発ととらえ、「報復の権利」や「文明」による「野蛮の征伐」の名のもとに、市民をも巻き込む激しいアフガニスタンの空爆が正当化されたことである。

だが、ドストエフスキーはすでに『虐げられた人々』（1861年）において、プーシキンによって鋭く提起されていた「血の復讐」の考察を深めて、一見正当に見える個人的なレベルでの「復讐の権利」の行使でさえ、「階級」や「国家」にも持ち込まれることによって「階級闘争」や「国家間の戦争」が拡大し、際限のない「報復」の連鎖となることを示唆していた¹⁾。

実際、このような「報復」のくり返しの結果、第2次世界大戦では5千万以上の死者と多くの犠牲者を出したのである。イギリスの研究者トインビーはこの悲惨な経験を踏まえて、大著『歴史の研究』において、西欧文明を唯一の文明として絶対的な価値を与えてきたそれまでの西欧の歴史観を「自己中心の迷妄」と断じつつも、他の文明でもこのような迷妄があったことを具体的に指摘し、それぞれの文明に独自の価値を認めて、国家の歴史ではなく文明を比較研究する比較文明学の基礎を打ち立てた²⁾。

本稿では大国ロシアとの戦争とその勝利を描いた『坂の上の雲』（1969-72年）から『沖縄・先島への道』（1974年）に至る司馬遼太郎の文明観の変遷を、「西洋の文明を目的」として³⁾、日本の「文明開化」を導いた福沢諭吉の文明観やペリーやゴンチャロフの沖縄観と比較しながら、司馬遼太郎による新しい文明観の模索に迫りたい。この作業を通じて、『沖縄・先島への道』が、『菜の花の沖』にいたる司馬遼太郎の作風の変化や比較文明論的な視野の広がり重要な役割を担っていることを明らかにできるだろう。

1、「国民国家」史観への懐疑——日本とロシアの近代化の比較

『坂の上の雲』第1巻のあとがきで、司馬は「維新によって日本人ははじめて近代的な『国家』というものをもった…中略…たれもが『国民』になった」、「不馴れながら『国民』になった日本人たちは、日本史上の最初の体験者としてその新鮮さに昂揚した」と書いた(Ⅷ・296～8)⁴⁾。

そして、この長編小説の主人公たちについて、「のぼってゆく坂の上の青い天にもし一朵の白い雲がかがやいているとすれば」、彼らは「それのみをみつめて坂をのぼってゆくであろう」

と明るい言葉で続けていた。

しかし、この長編小説の完結から2年後の1974年に沖縄を再び訪れて『沖縄・先島への道』を書いた司馬は、この冒頭近くにおいて、「住民のほとんどが家をうしない、約15万人の県民が死んだ」太平洋戦争時の沖縄戦にふれつつ、「沖縄について物を考えるとき、つねにこのことに至ると、自分が生きていることが罪であるような物憂さが襲って」くると書き、さらにその頃論じ始められていた沖縄の独立論に触れつつ、「明治後、『日本』になってろくなことがなかったという論旨を進めてゆくと、じつは大阪人も東京人も、佐渡人も、長崎人も広島人もおなじになってしまう。ここ数年間そのことを考えてみたが、圧倒的に同じになり、日本における近代国家とは何かという単一の問題になってしまうように思える」という重たい感想を記すのである⁷。

この時、司馬遼太郎はトインビーが発した「国民国家」史観の批判の重大さとその意味を実感し、「富国強兵」という名目で「国民」に死を強いる「近代国家」を超える新しい文明観を模索し始めるのである。

司馬にこのような考察を強いたのは、日本とロシアの近代化の違いを強く意識しつつ描いた『坂上の雲』であった。たとえば、『坂上の雲』の冒頭近くでは、1861年にロシア軍艦が強引に対馬での滞泊を求めたことについて、「こういう強盗式の侵略方法が、ロシアのやりかたである」と断言し、「ロシアの態度には、弁護すべきところがまったくない。ロシアは日本を意識的に死へ追いつめていた。日本を窮鼠にした」(Ⅲ・168)と説明していた⁸。

そして、民衆には将校になる可能性がほとんどなかったロシアの場合と比較しながら、司馬は明治の新しい教育制度についても、「社会のどういう階層のどういう家の子でも、ある一定の資格をとるために必要な記憶力と根気さえあれば、博士にも官吏にも軍人にも教師にもなりえた」とし、「こういう『国家』というひらけた機関のありがたさを、よほどの思想家、知識人もうたがいはしなかった」と述べ、日本の教育制度のすばらしさを讃えていた(Ⅱ・90)。

このような司馬遼太郎の判断には根拠があった。日本はすでに1889年に明治憲法を有していたが、ロシアが憲法を持つことになるのは、日露戦争敗北後の1906年のことであった。

そして、このような見方は福沢諭吉の歴史観と多く重なる。幕府の使節団の一員として1862年にロシアをも訪れていた福沢諭吉はピョートル大帝の改革を高く評価しつつも、当時のロシアの政治体制を「他の欧羅巴諸国と違ひ立君独裁という政事の立方にて、国帝一人の思ひ通り勝手に事を捌く風なり。故に、下々の情合上に通じずして、国中に不満を抱く者多し」と『世界国尽』(1869年)において厳しく批判していたのである(F・Ⅱ・145～6)⁹。

ところで、当初は自然法的信念を有していた福沢諭吉は、『学問のすゝめ』において、「天理人道に従て互の交を結び、理のためにはアフリカの黒奴にも恐入り、道のためには英吉利、亜米利加の軍艦をも恐れず」と高らかに宣言していた(F・Ⅲ・59～60)¹⁰。しかし、ギゾーやバッケルなどの近代の「国民国家」史観から強い影響を受けた後で、福沢は『文明論之概略』(1875年)において近代の国際関係を「平時は物を売買して互ひに利を争ひ、事あれば武器を以て相殺すなり」と位置づけ、「自国の独立を以て文明の目的と為す」と結論して、「富国強兵」による近代国家樹立の必要性を強調するようになった(F・Ⅳ・227)。

ここで注目したいのは、彼がここで「文明には限なきものにて、今の西洋諸国を以て満足す

可きに非ざるなり」としながらも、「文明、半開、野蛮の名称は世界の通論にして、世界人民の許す所なり」としていることである（F・IV・20～2）。

こうしたバックル的なヨーロッパ中心の「国民国家」史観を受け入れた福沢は、10年後の「国会開設」が約された後の1882年には、『時事新報』に載せた「朝鮮との交際を論ず」という論説で、「日本は既に文明に進^{すす}み、朝鮮は尚未開なり」と断じ、それは「亜米利加国が日本国に対するものと同様の関係なりとみる可きものなり」と続けて、「遂に武力を用ひても其進歩を助けんと切論するものは、…中略…我日本の為に止むを得ざる」からだ^よと論じた（F・VI・127～8）。この時、福沢は幕末に日本の志士たちを憤激させたペリーと同じ方法によって、朝鮮の「文明開化」をはかろうとしたのである。

日清戦争での旅順の陥落の報道に際し、慶應義塾の教員と学生は、塾長の小幡篤次郎のつくった「野蛮を懲らす文明の軍の前に敵はなし」という歌をうたいながらたいまつをかざして行進したが、その理由を鹿野政直は「日清両国の争いとは云ひながら事実^{じじつ}に於ては文野明暗の戦にして其勝敗の如何は文明日新の気運に関する」として、この戦争を「野蛮」に対する「神聖」な戦いと唱えた福沢諭吉の考えに鼓舞されたからだ^よと説明している⁹。

しかも、それは単に福沢だけの見解ではなかった。すでにバックルは『イギリス文明史』において、クリミア戦争を「知性の発達とは無縁の民族」であるロシアとトルコの「二つの国家の衝突によってもたらされた」として、「文明国」としてのイギリスと「野蛮な国」ロシアを対置していた¹⁰。日露戦争が勃発するとロンドンで3巻からなる戦史“Japan's Fight for Freedom”（1904～6）が刊行されたが、俵木浩太郎は著者のウィルソンがその序文で「ロシアは野蛮と反動の側にある」とし、一方「日本は正義のために、民族独立のために闘っている。もし敗北せんか、日本は亡び、フィンランドやポーランドの悲運に甘んぜねばならぬ」と書いていたことに注目している¹¹。ここでウィルソンは、「思慮ある人士にとって、ロシアではなく日本こそが、文明の諸理想、人類の思想の自由、民主的諸制度、教育、啓蒙、総じて言えば、我々が進歩という語によって理解するすべてを代表している」とし、「日本の勝利」を「野蛮な力と物質主義にたいする徳性の勝利である」とまで断言して、同盟国となっていた日本の「文明」を讃えていたのである。

こうして、日露戦争を「文明と野蛮」の対決ととらえていた司馬遼太郎の見方は、福沢諭吉やバックル、ウィルソンなどの戦争観とほぼ重なっていたのである。だが、『坂の上の雲』を書くことで戦争における情報の重要性を認識した司馬は、「日露戦争におけるロシアは世界中の憎まれ者であった」と記しつつも、それは「タイムズやロイター通信という国際的な情報網をにぎっている英国から憎まれていた」からだ^よと説明するようになる（Ⅷ・347）。

こうして、このような司馬遼太郎の戦争観は、冷厳な「事実」を直視しつつ、近代戦争としての日露戦争を詳しく調べた『坂の上の雲』を書くなかで大きな変化を遂げ、さらに、日本とロシアの近代化の類似性にも気づくようになるのである。山本新は「周辺文明論」の視点からロシアと日本の近代化を比較して、「100年以上の距離において二つの文明のあいだに並行現象がおこっている」ときわめて鋭く重い分析をした¹²。第3巻で「日本は歴史的にロシアの南下を恐れることおびた^{おび}だしい。さらには日本防衛の生命線として朝鮮半島を重視した」（Ⅲ・343）と記していた司馬も、第6巻では「西方のゲルマン文化を東方のロシアにうけわたす役割をし

た」ポーランドが、「ロシアの属領となってしまうため、壮丁が大量に徴兵され、極東の戦線」で無意味に亡くなっている悲惨な状況は、「日本と朝鮮との関係とやや似ている」、「ふるい時代、日本は朝鮮を通じて大陸文化を受容した」が、「いちはやく近代化した日本が朝鮮を隷属させようとし、げんにこの日露戦争のあと、日韓併合というものをやってしまい、両国の関係に悲惨な歴史をつくった」(Ⅵ・187)と記すのである。

このような司馬遼太郎の見方の深まりは、比較文明的な広い視点から日本の近代化を論じた梅棹忠夫と彼が1969年に出会い、その後たびたび行った対談にもよるところが大きいだろう。米山俊直が記しているように、梅棹は明治維新を「市民革命」として高く評価したが、その直後に「異民族を征伐する」という考えにつながる征韓論が現れたことにふれて、「市民革命をやりながら、帝国に変貌した」と指摘し、「帝国というのは、領土拡張主義と異民族支配ということです」と説明しているのである¹³⁾。

この長編小説の半ばほどで要塞旅順をめぐる悲惨な戦いを描く中で、司馬はクリミア戦争における要塞の攻防戦を描いたトルストイの小説『セヴァストーポリ』について言及し、まだ27歳の青年だったトルストイが、「セヴァストーポリの攻防戦」に「下級将校として従軍」していたことにふれて、トルストイが「籠城の陣地で小説『セヴァストーポリ』を書き、愛国と英雄的行動についての感動をあふれさせつつも、戦争というこの殺戮だけに価値を置く人類の巨大な衝動について痛酷なまでののろい声をあげている」と記すのである。そして、トルストイが「この戦争体験を通じて、国家を越えた人間の課題に到達しよう」と「普遍的な価値」を求めようになったことを高く評価した(V・230)。

そして、トルストイに会いにロシアへ赴いた蘆花にふれて、「近代を開いたはずの明治国家が、近代化のために江戸国家よりもはるかに国民一人々々にとって重い国家をつくらざるをえなかった」。「蘆花は、そういう国家の重苦しさに堪えられなかった。かれは国家が国民に対する檢察機関になっていくことを嫌悪^{かいたい}したと書く(Ⅷ・327～8)。

一方、「文明、半開、野蛮」という「名称は相対したもので」あり、「半開と雖どもこれを野蛮に対すれば亦これを文明と云わざるを得ず」として、「我日本^{じょうこく}上国の人民を以て蝦夷人に比するときは、これを文明と云う可し」と主張していた福沢諭吉は(F・Ⅳ・20～22)、日本とは違い「武風」の伝統のない、蝦夷地方や琉球国の人民を、「武辺の功名を争わしめんとするには、先ず其古俗旧習を一変して、政事教育の大体より、日常衣食住の細事に至るまでも、…中略…勉めて内地の風に倣^{なら}ひ、蝦夷琉球の両地方に純然たる尚武の新日本国を出現する程の大英断」が必要だとの見解を「外交論」において示したのである(F・Ⅶ・186～8)。

司馬遼太郎も『坂の上の雲』の「宮古島」の章で、日本海海戦の帰趨に大きな影響を及ぼしたロシア艦隊の発見について、沖縄の人々がけなげにも「サバニ」と呼ばれる小さな「くり船」でこの情報を報告したことを記して、こうして日露戦争の頃には沖縄の人々も日本人としての自覚や「尚武」の気概を持つようになっていたことを示した。

しかし、司馬はここで沖縄のひとびとの活躍を記しつつも、「日露戦争は日本人のこのような、つまり国家の重さに対する無邪気な随順心をもった時代におこなわれ、その随順心の上のみ成立した戦争であったともいえる」とも記していたのである(Ⅶ・329)。

さらに『沖縄・先島への道』では、東南アジアでの交易で栄えた沖縄王朝の華やかな歴史や、

1609年以降の薩摩藩による琉球支配を振り返ったあとで、司馬は「明治国家は、島津のような遣らずぶったくりではなく、多少の施設はつくった。明治17年に診療所ができ、明治18年に小学校ができた」と一応は明治国家による沖縄の近代化を評価した。

だが、司馬は「明治国家が、あの世界税制史上もっとも非人間的なものとされる人頭税を廃止するのは、明治36年になってからである」と続け、「昭和前期国家はさらにそれ以前の国家よりも重く、ついに沖縄本島を戦場にってしまう」と書き、本来は「軽ければ軽いほどよく、単に住民の世話機関にとどまるべき」、国家が「取り憑いて血を吸う化けもののようなものであった」と書いて、「富国強兵」のために「民衆」に犠牲を強いた近代的な「国民国家」に対する強い不信感を記したのである(190)。

2、「正義の戦争」の否定——「軍隊の論理」の批判

司馬遼太郎は「『坂の上の雲』を書き終えて」というエッセーで、日本陸軍の戦史が事実を伝えていないことが多いことに触れて「日本人は、事実を事実として残すという冷厳な感覚に欠けているのだろうか」と自問し、日露戦争のあとで日本人は、「自国や国際環境についての現実認識をうしなっていた」とし、「日露戦争の勝利はある意味では日本人を子供にもどした」と鋭く批判した¹⁴。

ただ、このような事実にたいする「冷厳な感覚にかける」のは、日本人だけではない。たしかにヨーロッパに限定すれば、バックルの主張したように、イギリスはクリミア戦争の勃発までの「ほとんど40年間にわたって平和を愉しんでいた」と言えるかも知れない。しかし、ゴンチャロフが批判しているように、イギリスは中国ではつい10年ほど前に阿片戦争を行っていたし、この少し後の1857年にはインドのセポイの乱を徹底的に弾圧することになる。つまり、一見客観的な装いをこらしたバックル的な「国民国家」史観は、ドストエフスキーが批判したように「自分の論理を正当化するために」、「故意に真実をゆがめて、見ざる聞かざるをきめこむことも辞さない」歴史観だったのである¹⁵。

しかし、松永昌三は「フランスのベトナム侵略を機に始まった清仏戦争」に際して福沢諭吉も「国交際の主義は修身論に異なり」とする論説で、「個人＝私人間のモラルは国家間においては適用されるべきではないこと、国家はたとえ過誤を犯しても容易に謝罪すべきではないと主張」しただけでなく、「仏蘭西の為を謀れば力を尽くして罪を支那に帰するの策を講じざるを可からず」とし、「^た仮令ひ兵力に訴へても其非を遂げざるを得ず、斯の如くして唯仏軍の戦勝」とさえなれば、「^た仏人は世界万国に対して腕力に於て武勇者たるのみならず、道徳に於ても亦正義者の名を博す可し」とバックル的な歴史観をより直截に展開したのである¹⁶。

一方、司馬遼太郎は『沖縄・先島への道』において、「嘉永6(1853)年江戸湾において幕府を脅しあげて開国をせまったペリーとその米国東洋艦隊が、『来年、もう一度くるからそれまでに返事をせよ』と言いのこしていったん上海にむかって去ったとき、途中、この海中にそびえる西表島に目をつけ、島陰に投錨しているのである。艦隊にR・G・ジョーンズという技師が乗り組んでいたが、この技師が上陸して地質調査をしたところ、石炭が豊富であることがわかった」と書いている(119)。

実際、幕府との交渉に際し「武力による上陸」を考へて、「戦時中と同様に乗組員を徹底的に訓練」していたペリー提督は、再度日本に訪れる前に沖縄で、「自分の要求全部に対して満足の回答を貰わなかったら、2百人の兵士を上陸させ」、「王宮を占領」と言明して、「貯炭所の建設」などの要求を認めさせていたのである¹⁷⁾。

興味深いのは、長崎で開国交渉を行っていたロシア艦隊がアメリカの艦隊よりも少し遅れて沖縄の那覇にも訪れ、そこでペリー提督が他国の艦船に対して「この諸島を自国の保護下に引き取った」と書面で通告しただけでなく、「石炭をストックする小屋」も建てて、二日前に7隻の艦隊を率いて江戸に出航したという情報を得ていたことである¹⁸⁾。

『沖縄・先島への道』での司馬の視線は、日本の近代化に大きな役割を果たしたペリーの開国交渉が、すでに沖縄の位置の戦略的な重要性を踏まえており、現在の基地の問題にも直結していることを見ていたのである。

さらに、司馬は晩年の『この国のかたち』第6巻で、再び開国の要求に対する「返事を得べく7隻をひきいて江戸湾頭を押し」、「開国をせまった」ペリーについて言及している。ここで司馬は「当然ながら文明の使者として、善事をなしているつもりだった」と分析し、「よくいわれるように、M・C・ペリー准将は、19世紀後半のアメリカ人の”明白な運命(マニフェスト・デスティニー)”という信念を共有していた。白人優位の精神でもって北米全体に領土を膨張させ、文明を普及し、周辺の劣等民族を感化するという自明の働きのことである」と説明し、「このペリーの態度は、日本人の感情を刺激した。…中略…攘夷論が沸騰した」と続けた¹⁹⁾。

実際、福沢諭吉は自分が10年後に知った開国時のエピソードとして、アメリカ艦隊の水夫が上陸した折りに、夏の日中に縁側で昼寝していた日本人の僧侶と小姓を、昼日中から男色をしていると勘違いして報告した時、怒りを抑えきれなかったペリー提督が、「この禽獣国民、砲撃して之を鑿にす可しとて、扼腕瞋目して将さに起たんとする勢」だったことを記している(F・VII・168-9)。つまり、自国の優秀さのみを強調し、他国を「野蛮」として非難したギゾーやバククル流の「国民国家」史観によるとき、「文明」の名のもとに「武威を示して其人心を圧倒し」て「開国」を迫り、それでも「自国」の要求を呑まないときには、他国を「野蛮」として決めつけて「征伐」することすら可能になるのである。司馬遼太郎もこのようなペリーの行動とその影響を、「国民国家」史観を批判した周辺文明論的な視点から分析し得ているのである。

このような司馬の考察は、太平洋戦争時の体験の考察と直結している。たとえば、司馬は『竜馬がゆく』を執筆中の1964年に「百年の単位」というエッセーで、敵と戦う際に大八車などをひいて逃げてくる避難民をどうするかという戦車隊の将校の質問に対して「大本营少佐参謀」が、「ごくあたりまえな表情」で「轢き殺してゆく」と答えたことを記した後で、次のように続けていた。「私は、その現場にいた。私も四輻の中戦車の長だったから、この回答を、直接、肌身に感ぜざるをえない立場にあった」と記して、その時に「(やめた)と思った。そのときは故障さ、と決意し、故障した場所で敵と戦おうと思った」と記しているのである。つまり、司馬はこの時上官の命令に背くという軍隊における重大な軍規違反にあたる判断をしたのである²⁰⁾。

だが大江志乃夫は、日露戦争中の1905年にツアーリへの請願のために冬宮広場に集まった

数千人の民衆が軍隊に発砲され多数の死傷者をだしたいわゆる「血の日曜日」事件以降、ロシアでは「日本人からは退却し、同胞は射つのか」という不満が高まり、民衆の間では軍隊は、「祖国を守るために敵とたたかう」のではなく、「人民を弾圧するためのツァーリの軍隊ではない」という認識が強まり、「いっきよに革命の波が全国に広がりはじめ」たと記している²¹。司馬は「日本人のために戦っているはずの軍隊が、味方を轢き殺すという論理はどこから生まれるのか」と自問していたが、もしこのような事態が起きていたら日本でも、アメリカ軍の上陸の前に国内は未曾有の混乱状態となったかもしれないのである。その意味で軍規には背くものの若き司馬の判断は、正しかったといえよう。

ただ、その時司馬はこのような「大本営少佐参謀」の言葉について、「私はこのとき、日本陸軍が誕生したとき、長州藩からうけついで遺伝因子をおもわざるをえなかった」と続けて、参謀の判断を「長州軍閥」という特殊性に起因させていた。しかし、『坂の上の雲』を書き終えた年に書いた「石鳥居の垢」において司馬は、『轢ころしてゆけ』といった大本営少佐参謀の言葉を引用しつつ、「国民」を「守るために軍隊があり、戦争もしているというはずのものが、戦争遂行という至上目的もしくは至高思想が全面に出てくると、むしろ日本人を殺すということが論理的に正しくなるのである」と記し、「ひるがえっていえば沖縄戦において県民が軍隊に虐殺されたというのも、…中略…米軍が沖縄をえらばず、相模湾をえらんだとしてもおなじ状況がおこったにちがいがなかった」と書いて「軍隊」自体の論理に迫るようになる²²。

このような戦争観は、海軍特攻隊隊長だった作家の鳥尾敏雄との沖縄での対談を経て、いっそう深まってくるのである。司馬は彼と同じ「世代の学生あがりの飛行機乗りの多くは沖縄戦での特攻で死んだ」と記していたが（38）、鳥尾も自分の体験をもとに描いた作品『出孤島記』で、自分たちの水上特攻兵器がアメリカ軍からは「自殺艇」と呼ばれて、「野蛮」視されていたことを紹介しつつも、「私は無理な姿勢でせい一ぱい自殺艇の光栄ある乗組員であろうとする義務に忠実であった」と記し、「いよいよ我々集団自殺者の祭典の時刻が近づいたように思われた。我々のその行為によって戦局が好転するとも考えられなかったが、それでも誰に対してしたか分からぬ約束を義理堅く大事にしていたのだ」とその理由を説明している²³。

しかし、「生命」を大切にしないという点では、旧日本軍だけでなく、自らを「文明」国とみなしていたアメリカにおける「軍隊の論理」も大差はない。鳥尾は先の作品で主人公に、「既に原子爆弾が広島と長崎に投下されてしまった」ことを無電で知っていたが、「近代的なく知」の産物であるその「新型爆弾」により、「山も一部はどろどろに崩れ落ち、人間はその光線を受けただけで消失したと伝わった」と記させている²⁴。

司馬遼太郎も『坂の上の雲』において、太平洋戦争を行った「日本の政治的指導層の愚劣さをいささかでもゆるす気になれないのだが」と断りつつも、東京裁判におけるインド代表の判事バル氏のアメリカ批判を引用しつつ、広島への原爆投下について、「もし日本と同じ条件の国がヨーロッパにあったとして…中略…白人国家の都市におとすことはためらわれたであろう」として批判している（Ⅲ-169～170）。

確かに、毒ガスの使用については戦争犯罪として厳しく裁く一方で、それよりもはるかに甚大な被害を一般市民にももたらした核兵器の使用が裁かれないのは不正義である。1998年には、インドとパキスタンが相次いで核実験を行って、世界から輿論を買ったが、司馬のこの言

葉は、核実験停止条約を提唱しつつ、「核の先制使用」については権利を保有したまま今なお臨界前核実験を行い続けているアメリカに対する非西欧諸国の深刻な不安感を言い当てているように思える。

つまり、「文明」国が「野蛮」国を攻めるときに、その攻撃によって多くの死者や悲惨な状況が生まれても、それは「野蛮」な国に住む住民が自ら「文明」的な政府を作ることができなかったためだとして、被害者の側に自己責任を押しつけて、大量殺人兵器の使用をもためらわなかったのである。

こうして司馬の言葉はなぜ現在、日本を含めた世界各地で「ナショナリズム」が再び燃え上がってきたかをもよく説明しているだろう。実際、比較文明論の創始者の一人とされるダニエーフスキイは、クリミア戦争などに対する西欧の「二重基準」を鋭く批判した²³。ロシアでは西欧文明のみが絶対的な普遍性をもつとする考えに対する反発から、「国粋」的な考えが広まったのである²⁴。

この意味において注目したいのは、日清戦争で日本軍が連戦連勝を収めた後で福沢諭吉が論説において、「講和の条件として提出する」報奨金や土地などは、「我思ふ所に適せざるものは、会釈なく却下して」、「命令に従うか、更に戦うか」の二者択一を迫るという、「純然たる強迫主義を以て之に臨むの外ある可からず」とし、その理由を「^お凡そ人間に復讐の執念ほど恐る可きはなし」とし、降伏によって時をかせぎ、再挙を企てようとする「彼の政府の復讐力を滅殺する」ためだと記したことである（F・Ⅷ・253）。

一方、中江兆民も『三酔人経綸問答』（1887年）において「昔なつかしと新し好き」の「二つの党派」の対立に言及した軍拡主義者の「豪傑君」に、文明の発達につれて「武器はいよいよ優秀に」なり、強国プロシアとフランスの国民は、「おたがいに以前の敗戦を恥じ」、「いつまでも絶えることのない復讐心」によって、「臥薪嘗胆」に耐えつつ「富国強兵」に努めたのだと説明させている²⁵。しかし、中江兆民は「豪傑君」の論理だけを記したのではなく、これに対して「平和主義者」の「洋学紳士」にこのような「報復の権利」の危険性をも認識させて、「道義立国」の必要性をも語らせていた。実際、第1次世界大戦に敗戦したドイツに対しても、再び立ち上がれないようにと多額の賠償金が請求された。しかしその結果、未曾有のスーパー・インフレがおきたドイツでは、ドイツ帝国が成立するきっかけとなった普仏戦争（1870～1）での勝利を強調してドイツ人の「自尊心」に訴えつつ、第一次世界大戦での勝利国への「復讐心」を煽ったヒトラーの演説が、出征して敗戦の悲哀をなめた民衆の心をとらえることになった。こうして、「富国強兵」策は強国が互いに「報復の権利」を主張して、武器の増産と技術的な革新を競いあう中で、ついには生物・化学兵器や原子爆弾などの大虐殺兵器さえもが使用されるにいたったのである。

つまり、「文明の衝突」は近代国家が「国民国家」史観に立つとき起きるのである。このように見てくる時、司馬遼太郎が『沖繩・先島への道』において、「軍隊というものは本来、つまり本質としても機能としても、自国の住民を守るものではない、ということである。軍隊は軍隊そのものを守る」と記しているのは、かつて自分が信奉していた近代の「国民国家」史観に対する根本的で鋭い告発とも言えるだろう。さらに司馬は「この軍隊の本質と摂理というものは古今東西の軍隊を通じ、ほとんど稀有の例外を除いてはすべての軍隊に通じるように思え

る」と書いて、昭和前期の日本の軍隊だけでなく、「軍隊というものの論理」自体を厳しく批判し得ているのである（36～40）。

ドストエフスキーは『罪と罰』において、「非凡人の理論」を生みだして「自己を絶対化」し、「悪人」と規定した「他者」の殺害を行いつつ、「近代的なく知」によっては自らの理論には間違いを認めることができなかつた主人公の若者ラスコーリニコフの悲劇を描き出した²⁸。司馬もこの時「自己を絶対化」したラスコーリニコフの「非凡人の理論」と同じ「論理」構造を、昭和前期の日本における「国民国家」史観や「軍隊の論理」の内に見出して指摘したのである。

3、「沖縄・先島への道」における「多様性」の考察 — 方言、ヤポネシア論

この意味で注目したいのは、司馬がここで沖縄方言について強い関心を示すとともに、「方言」に関連して「共通語」の問題にも踏み込んでいることである。最初にこの話題が出るのは、『石垣島』の章で「これを国家主義による方言の抑圧だとし、沖縄を被害者の場に置く論議が、本土のとくに東京の知識人のあいだでたえずおこなわれてきたが、なぜ沖縄だけが騒がれねばならないのか、私にはよくわからない」とし、「鹿児島でも高知県の小学校でも、戦前戦後を問わず、同様のことがおこなわれてきた」と指摘し、「うっかり方言を使うと何かが減点になるという罰があることも、沖縄県とかわらない」として、「共通語による会話が成立」したことのよさをここでは強調している。

しかし、終章の「与那国島」では、いささかニュアンスが異なる。その「村の劇場」という節で司馬はまず、大阪でロシア語を教えていたロシアの天才的な言語学者ネフスキーが、「帝政ロシアの末期、ペテルブルグの学生だった」が、「単に民権党の党员だったということで検挙され、シベリアに流刑となった後に日本に亡命したことを記している（200）。そして、「沖縄の『万葉集』といわれる『おもしろさうし』」に言及し、月には「人がいて、かれは水桶に水を汲んでいるという伝承」が、極東のシベリアやアイヌだけでなく、「沖縄にもある」ことをネフスキーが宮古島で発見していることに注目している。そして、『万葉集』には大和朝廷によって「画一化が遂げられてしまう」以前には「野にも山にも、韻をふんで思いを歌にし合う心が、たっぷりと残っていた」頃の歌が収められていたと指摘し、「比嘉春潮氏がいわれるように、明治3、40年ごろまでの農村では即興の琉歌をたえず口ずさんでいたとすれば、明治の画一文化の先兵ともいうべき小学校教育の普及が、沖縄の「おもしろ」心の息をとめてしまったということになるだろうか」という感想を記している（206）。

ここで私たちは司馬が「画一文化の先兵ともいうべき小学校教育」と記していることに注目したい。このことは近代的な教育全体に係わるのである。日本の教育の水準の高さに関連して、『坂上の雲』の第3巻で「日清戦争から日露戦争にかけての十年間の日本ほどの奇跡を演じた民衆は、まず類がない」とまで讃えていた司馬遼太郎は、『坂上の雲』を書き終えた後には一般の民衆についても、「軍司令部のおよそ非戦術的な肉弾攻撃の命令に対し、兵士たちはほとんど黙々と機械的に集団死を逃げて」と指摘し、「命令に対する絶対的な受動性をかれらは体中でもっていた」と、一元的な価値観で行われた日本の近代化を鋭く批判するよう

になるのである²⁹。

後に司馬は『「昭和」という国家』において、「今日の日本はすこし単純な文化になっているかな」という心配とともに、「ひとつの国が単純なひとつの文化で支配されているような状態では、結局その国、あるいはその社会は衰弱するだろう」という判断を記している³⁰。

この意味で注目したいのは、司馬が「何度か那覇にきたが、この町で、平静な気持ちで夜をすごせたことがない。一体、日本とは何かということを否応なく考えこまされてしまう」と記した後で、「そういう場合ひるがえって稲を植え、漁労をして暮らしていた倭人のころを想うと、沖縄の町や島々に原倭人の風姿をありありと見るような思いがした、にわかには気が青空へつきぬけてゆくように愉快になる」(25)と書いていることである。

実は司馬と島尾敏雄との出会いの意味もここにある。島尾敏夫は単に特攻隊の厳しい体験を描いただけでなく、このような体験を彼に強いた「国民国家」史観を超える道を模索していたのであり、そのような「近代国家」に対する別な価値観を沖縄に見出して、「琉球弧」とか「ヤポネシア」という概念で一国家にとどまらない、文化の交流圏を描き出していたのである。こうして、彼は「琉球弧の個性は狭い日本のなかにうまくおさまるはずがない。南島がもっているところの特質は、ヤマト(本土)で展開された日本国家というものよりも、時間的、空間的にもっと長い広い何かであるように思う」と書いた³¹。司馬遼太郎も「たがいに『琉球弧』などの原日本人のイメージを交換」しあい、「自分を日本人と規定するよりも倭人と規定するほうが、ずっと自分がひろがってゆく感じがする」と言うと、「うなずいてくれた」と記していたのである³²。

このことは「稲は沖縄の島々をつたって本土にきた」という考察を記した柳田国男の『海上の道』に言及しながら、黒潮について記している「石垣島」の章でより明確に示されている。「時速3ないし5ノット、幅5、60キロといわれるこの巨大な流れは、われわれ日本列島の住民の歴史と生活を、もっとも基底において決定しつづけてきている。このことは、繰り返したい。われわれが、八重山諸島の最南端から北海道の最北端にいたるまでの島々に住み、その生産文化の内容と形式をきめてきた重要な要素が、古くは沿岸のひとつひとつから『黒瀬川』という親しみをこめた名称でよばれてきたこの暖流であるといえる」(61)。

このような考察を踏まえて書かれたのが、一介の商人でありながら日露の衝突を防ぐことになる高田屋嘉兵衛を主人公とした『菜の花の沖』(1979～82)であり、若き嘉兵衛は黒潮の流れを観察する少年として描かれるのである。

ところで、福沢諭吉は『文明論之概略』で「水火を制御して蒸気を作れば、太平洋の波濤を渡る可し」とし、「智勇の向ふ所は天地に敵なく」とし、「山沢、河海、風雨、日月の類は、文明の奴隷と云う可きのみ」と断言した(F・IV・144)。福沢の比較文明論的な視野と方法を高く評価した神山四郎は、「これは産業革命時のイギリス人トーマス・バククルから学んだ西洋思想そのものであって、それが今日の経済大国をつくったのだが、また同時に水俣病もつくったのである」と批判し、「明治には『奴隷』と思った自然から今はしっぺ返しを受けている」と続けていた³³。

興味深いのは、旅の初めの頃にあまりに人工的なロンドンの公園を批判したゴンチャロフが、琉球の森について「何処を見ても人間の目と手が細やかに行き届いている。人間は自然か

ら夥しい幸を取ってはいるが、決して自然の威厳を傷つけたり、自然を軽んじたりはしていない」と絶賛していたことである³³。

司馬もまた戦争で破壊される以前の沖縄の美しさについてこう書いている。「私の想像の中の首里は、石垣と石畳の町で、それを、一つの樹で森のような茂みをなす巨樹のむれが、空からおおっている。…中略…たしかに都市美としては奈良をもしのぐものがあつたであろう」(18)。さらに、司馬はここで「人類に金属器が普及したときに、社会が飛躍的に大型化した」だけでなく、「生産と人間を独り占めしたいという大権力も成立した」と指摘していた(109)。

一方、堀田善衛、宮崎駿との鼎談集において、司馬は「近代が興ることによって、…中略…ヨーロッパの木は手近のところは裸になってしまった」と指摘し、焦眉のこととなった地球の温暖化に関連して、自動車の排気ガスの規制の提案が出ているが「日本もアメリカもいい返事をしない」ことを批判している。これをうけて堀田は「これからは日本は自国一国ではなしに、地球全体のことを考えていかないとやっていけなくなる」と発言しているのである³⁴。

さらに、樋口陽一との対談では「どうやら世界は人権が『公』になっている」と指摘するとともに、「熱帯林を伐採する日本の企業に対して抗議がいっぱいくる」ことにも言及して「どうも自然も『公』ですね」と述べている³⁵。実際、近代の19世紀的な〈知〉に基づく「国民国家」史観は、数々の植民地戦争や世界戦争だけでなく、地球規模の環境破壊をも招いたが、現在に至っても世界の各地で紛争は止まることを知らず、多くの動植物の種が滅亡し、地球の温暖化も急速に進んでいる。つまり、司馬には「自己(自国・自民族)」が「他者(他人・他国・他民族・自然)」を支配しようとしてきた西欧近代文明にたいする厳しい反省があるのである。

この頃の司馬には、このような近代的な「国民国家」型のモデルを乗り越えることができなければ、真の「国際化」はおろか、現代の青少年をとらえている不安を解決することもできないのではないかという批判があつたといえよう。それゆえ司馬遼太郎は『菜の花の沖』で、海が好きだった若者を主人公として、豪商・高田屋嘉兵衛となつた彼の対話的な方法を通して、「周辺文明論」的な視点から「多様な価値観」を許容した「江戸期」の特色と「文明の衝突」を防いだ嘉兵衛の文明観の意義を明らかにしたのである³⁶。

こうして、『沖縄・先島への道』における沖縄の位置づけは、アイヌ文化だけではなく、オホーツク文化にも日本の原形の一部を見るような『菜の花の沖』以降の視野の広がりや新しい「文明観」の模索と直結していたのである。

(本稿は2000年に沖縄で開かれた比較文明学会第18回大会の分科会「比較文明と文化」で、「司馬遼太郎における文明観の変遷と沖縄 ― ペリー提督と作家ゴンチャロフの沖縄観との比較を通して」という題名で発表したものに、その後の考察を踏まえて加筆と削除を行ったものである。なお、本稿において敬称は省略した)。

注

- *1 高橋「欧化と国粹——日露の「文明開化」とドストエフスキー」刀水書房、2002年参照
- *2 トインビー『歴史の研究Ⅰ』、長谷川松治訳、社会思想社、昭和42年、75～6頁
- *3 福沢諭吉『福沢諭吉選集』第三巻、岩波書店、57～8頁。以下、本稿においてはこの選集をFと略して、引用箇所は本文に巻数はローマ数字で、頁数は漢数字で表す
- *4 司馬遼太郎『坂の上の雲』文春文庫、第2巻、335～9頁。以下、本稿においては文春文庫全八巻より引用し、巻数はローマ数字で、頁数は漢数字で表す。ただ、この文庫では単行本の際の「あとがき」(1～6)が全部まとめて第八巻に収録されており、巻数とあとがきの番号は対応していない
- *5 司馬遼太郎『沖繩・先島への道』(『街道をゆく』第6巻)、朝日文芸文庫、1978年、19頁、24頁。以下、引用頁数は本文中に()の中に数字のみで示す
- *6 『坂の上の雲』については、高橋「『文明の衝突』と『他者』の認識——『坂の上の雲』における方法の変遷」『異文化交流』創刊号、東海大学「異文化交流研究会」編参照
- *7 外川継男はこのような福沢諭吉のロシア観が、当時ロシアと覇権を争っていたイギリスの視点に強く影響されたものであることを明らかにしている(外川継男、「明治維新前後の日本人のロシア観」、中村喜和・トマス・ライマー編『ロシア文化と日本—明治・大正期の文化交流』彩流社、1995年、49頁参照)
- *8 この時期の福沢諭吉の比較文明論的な広い視野については、神山四郎『比較文明と歴史哲学』刀水書房、1995年、217～231頁、および高橋「激動の時代とアイデンティティの模索——『竜馬がゆく』における方法としての比較」『異文化交流』第2号、東海大学「異文化交流研究会」編、2000年、95～100頁参照
- *9 鹿野政直『福沢諭吉』(『人と思想』第21巻)、清水書院、173頁。なお福沢諭吉の文章は、丸山真男『福沢諭吉の哲学』、岩波文庫、33頁より引用
- *10 Bokl',G.T., Istoriya tsivilizatsii v Anglii, Spb.,1896,vol.1.,pp.75-78 (ここでは同じ訳者による1896年版によった)
- *11 俵木浩太郎『文明と野蛮の衝突——新・文明論之概略』ちくま新書、2001年、181～2頁
- *12 山本新『周辺文明論——欧化と土着』神川正彦・吉澤五郎編、刀水書房、1985年、30頁
- *13 米山俊直「同時代の思索者——司馬遼太郎と梅棹忠夫」梅棹忠夫編著『日本の未来へ——司馬遼太郎との対話』NHK出版、2000年、259～260頁
- *14 司馬遼太郎『歴史の中の日本』中公文庫、昭和51年、105～6頁
- *15 高橋、前掲書、160頁
- *16 松永昌三『福沢諭吉と中江兆民』中公新書、2001年、147～8頁
- *17 『ペルリ提督日本遠征記』第3巻、土屋喬雄・玉城肇訳、岩波文庫、1955年、45頁
- *18 ゴンチャロフ『日本渡航記』高野明島田陽訳、雄松堂書店、昭和44年、538頁
- *19 司馬遼太郎『この国のかたち』第6巻、文春文庫、10頁
- *20 司馬遼太郎『歴史の中の日本』「百年の単位」中公文庫、289～290頁
- *21 大江志乃夫『バルチック艦隊』中公新書、1999年、238頁

- *22 司馬遼太郎『歴史と視点』所収、新潮文庫、1972年、90頁
- *23 島尾敏雄『その夏の今は 夢の中での日常』講談社文芸文庫、1988年、13～4頁
- *24 同右、14～6頁
- *25 Danilevsky, N. Ya., Rossiya i Evropa, izd. Glagol i izd. S-Peterburgskogo univer-siteta, SPb., 1995, pp.40-41
- *26 高橋「ヨーロッパ『近代』への危機意識の深化（1）—ドストエーフスキイの西欧文明観」『講座比較文明』第一巻、朝倉書店、1999年、50～63頁参照
- *27 中江兆民『三酔人経綸問答』岩波文庫、64、89頁
- *28 高橋『「罪と罰」を読む—く知—の危機とドストエーフスキイ』刀水書房、2000年参照
- *29 司馬遼太郎『歴史を動かすもの』『歴史の中の日本』中公文庫、109頁
- *30 司馬遼太郎『「昭和」という国家』NHK出版、150頁
- *31 牧祥三「解説」、前掲書（『沖縄・先島への道』）、216頁
- *32 島尾敏雄も司馬との対談について、「私は剣の達人とわたり合うかのような緊張に傾いて」『対談場に臨んだ』が、案に相違して「私は頗る楽しい一夜を彼と共に過ごした」と記している（『透明な時の中で』、潮出版社、昭和63年、139頁）
- *33 神山四郎『比較文明と歴史哲学』刀水書房、1995年、115頁
- *34 ゴンチャロフ、前掲訳書、347頁
- *35 司馬遼太郎・堀田善衛・宮崎駿『時代の風音』朝日文芸文庫、1997年、209～210頁
- *36 司馬遼太郎・樋口陽一『明治国家と平成の日本』『対談集・東と西』朝日文芸文庫、1995年、301頁
- *37 高橋「文明間の対話—『菜の花の沖』における異文化交流と日露交渉」（『異文化交流』第3号、東海大学外国語教育センター「異文化交流研究会」編、2001年）参照